様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００４８１

研究課題名（和文）中世フランス文学における「伝記物語」の系譜

研究課題名（英文）The Genealogy of the Biographical Romance in Medieval French Literature

研究代表者
渡邉　浩司（Watanabe, Koji）

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：２０２７８４０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：クレティアン・ド・トロワ以降の12世紀後半から13世紀後半に古フランス語韻文で書かれたアーサー王物語群のうち、主人公の誕生（あるいはアーサー王宮廷への出現）から語り始め、主人公を待ち受ける冒険と武勇をたどり、主人公の結婚までを描いた「伝記物語」と呼ばれるジャンルの再評価に努めた。古フランス語による「伝記物語」には約10編の作品が現存するが、本研究ではこのうち、本邦では未紹介にとどまってきた『フロリヤンとフロレット』と『クラリスとラリス』の分析を中心的に行い、先行作品群との比較からその独創性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中世期の英仏フランス語圏で誕生したアーサー王物語群の中で、12世紀後半から13世紀後半にかけて古フランス語韻文で書かれた作品群は、クレティアン・ド・トロワの韻文物語群や、13世紀半ばまでに成立した長大な散文「聖杯物語群」との比較から、独創性を欠いた価値の劣るものと見なされてきた。中世フランス文学研究のパイオニアの1人ガストン・パリスはこうした韻文作品群を筋書きの点から「伝記物語」と「挿話物語」の２つに分類したが、本研究ではこのうちの「伝記物語」の独創性を明らかにすることで、アーサー王伝承が活力を失いつつあった13世紀後半に書かれた作品群の再評価につながる道筋を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This is an attempt of reevaluation of the genre called 'biographical romance', which we can find among the Arthurian tales written in Old French verse from the latter half of the 12th century (after Chretien de Troyes) to the latter half of the 13th century. Arthurian tales belonging to this genre begin with the birth of the protagonist (or his appearance in King Arthur's court), tell his adventures one after the next to accentuate his bravery, and depict his marriage at the very end. There are about ten 'biographical romances' in Old French, but this research focuses on the analyses of two romances which have remained unappreciated to date in Japan, that is Floriant et Florete and Claris et Laris, in order to clarify their originality by comparing them with previous Arthurian romances.

研究分野：人文学

キーワード：伝記物語　アーサー王物語　中世フランス文学　『フロリヤンとフロレット』　『クラリスとラリス』　『ギヨーム・ド・パレルヌ』　クレティアン・ド・トロワ　妖精モルガーヌ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）アーサー王と円卓騎士団の活躍を描く「アーサー王物語」は、ヴァース作『ブリュット物語』（ジェフリー・オヴ・モンマスがラテン語で著した『ブリタニア列王史』の古フランス語による翻案）を契機に 12 世紀後半に誕生し、クレティアン・ド・トロワの韻文作品群や『ランスロ＝聖杯』および『散文トリスタン物語』といった長大な散文物語群により、13 世紀中頃までにフランス語圏で花開いた。

（２）国際アーサー王学会に所属する世界中の研究者は、こうした「アーサー王物語」の本流に大きな関心を寄せてきたが、1980 年代以降になると中世末期に書かれた『ペルスフォレ』や『アルテュス・ド・ブルターニュ』といった長編散文作品の再評価が始まり、その重要性が明らかにされつつある。これに対して、クレティアン・ド・トロワ以降の 12 世紀後半から 13 世紀後半にかけて中世フランス語韻文で書き継がれてきたアーサー王物語群には、しかるべき評価が与えられてこなかった。

２．研究の目的

（１）12 世紀後半に英仏のフランス語圏で誕生した「アーサー王物語」は、以後ヨーロッパで人気を博し、トマス・マロリーが 15 世紀に中英語で著した『アーサーの死』によって集大成される。ヨーロッパで３世紀の間に書き継がれてきた「アーサー王物語」の中では、古フランス語韻文および散文で書かれた作品群が量的にも質的にも重要であり、なかでもクレティアン・ド・トロワの韻文物語群や、13 世紀半ばまでに成立した長大な散文「聖杯物語群」には数多くの研究が蓄積されてきた。その一方で、12 世紀後半から 13 世紀後半にかけて古フランス語韻文で書かれた作品群は、先行作品群の模倣・亜流と見なされ、その研究自体も小規模なままにとどまってきた。

（２）そのため本研究では、こうした韻文作品群のうち、ガストン・パリスが「伝記物語」と呼んだジャンルに焦点を当て、その再評価を行うことを目的とした。なかでも本邦では未紹介にとどまってきた『フロリヤンとフロレット』と『クラリスとラリス』の分析を中心的に行い、「伝記物語」の全体像の把握に努めた。

３．研究の方法

（１）本研究の対象となった「伝記物語」は、クレティアン・ド・トロワ以降に書かれた古フランス語韻文作品群を筋書きの点から分類するために、ガストン・パリスが用いたジャンルの名称であり、「１人の主人公の誕生から、あるいは少なくともアーサー王宮廷への出現から物語を始め、その宮廷で物語の主題となるべき冒険が主人公に課され、主人公の武勇を多少とも長々と語り、最後には主人公の結婚にいたるもの」である。リシャール・トラクスラーが 1997 年に刊行した分析的書誌『クレティアン・ド・トロワ以降の韻文アーサー王物語』によると、12 世紀後半から 13 世紀後半にかけて書かれた韻文アーサー王物語は 16 編現存するが、その中で「伝記物語」に該当するのは、ロベール・ド・ブロワ作『ボードゥー』、『名無しの美丈夫』、『双剣の騎士』、『クラリスとラリス』、『デュルマール・ル・ガロワ』、『フェルギュス』、『フロリヤンとフロレット』、『グリグロワ』、『メロージス・ド・ポールレゲ』、『イデール』、『ジョフレ』である。このうち、『ボードゥー』、『名無しの美丈夫』、『双剣の騎士』、『フェルギュス』、『グリグロワ』、『メロージス・ド・ポールレゲ』、『イデール』については本研究開始以前に詳しく分析する機会があり、中央大学の『人文研紀要』および『仏語仏文学研究』、人文科学研究所の研究叢書にその成果を発表した。なかでも『双剣の騎士』についての拙論「３本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック－13 世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」（『続　英雄詩とは何か』中央大学出版部、2017 年、所収）は、このジャンルに属する作品の再評価の試みの典型例である。本研究の中心を占める『フロリヤンとフロレット』および『クラリスとラリス』についても、写本伝承、作者や成立年代、先行作品との影響関係などを手掛かりにしながら、先学たちの諸説を批判的に検討した。

（２）本研究の初年度には『フロリヤンとフロレット』、２年目から３年目にかけては『クラリスとラリス』の精読と分析を行った。底本に用いたのはいずれも、パリのオノレ・シャンピヨン出版から刊行された最新の校訂本であり、『フロリヤンとフロレット』はアニー・コンブ氏とリシャール・トラクスラー氏、『クラリスとラリス』はコリンヌ・ピエールヴィル氏が校訂を担当している（刊行年はそれぞれ 2003 年と 2008 年）。この２作品を対象にした先行研究については、日本で入手困難な文献を探すために、研究開始時点ではパリのフランス国立図書館への出張を予定していたが、コロナ禍のために残念ながら研究期間中の出張を実現することができなかった。そのため、２作品の校訂を担当したトラクスラー氏およびピエールヴィル氏と電子メールで意見交換を行い、最新の研究動向に関する情報を得た。お二人からはさらに貴重な論考をお寄せいただき、その拙訳を中央大学の『仏語仏文学研究』に発表することができた。

４．研究成果
（１）本研究の成果は、「伝記物語」に属する『フロリヤンとフロレット』と『クラリスとラリス』を主な対象としたものであり、中央大学の学術雑誌『人文研紀要』および『仏語仏文学研究』に論考の形で発表したほか、国際アーサー王学会日本支部の 2022 年度年次大会では、『クラリスとラリス』をテーマにした研究報告を行った。その一方で、トラクスラー氏とピエールヴィル氏が用意して下さった論考は、その拙訳を中央大学の『仏語仏文学研究』に発表した。本研究で扱った主要な論点は、以下のとおりである。
（２）『フロリヤンとフロレット』をめぐる諸問題
①写本と推定創作年代　8 音節詩句 8278 行からなる作者不詳の『フロリヤンとフロレット』は、シチリア王子として生まれたフロリヤンが数々の冒険を経て、家令に奪われた王位を奪還し、コンスタンティノープル皇帝の娘フロレットを妻に迎える物語である。こうした舞台設定は、中世フランスの「アーサー王物語」の中でも珍しい。この作品を伝える唯一の写本はニューヨーク公共図書館が所蔵する 70 葉からなる 13 世紀末の写本で、作者も写字生も不明であるが、使われている言葉にはフランス北部と東部の方言特徴が残されている。『フロリヤンとフロレット』にはクレティアン・ド・トロワの作品群の影響が大きく、クレティアンの遺作『グラアルの物語』からは複数行にまたがる借用が認められる一方で、『クラリスとラリス』からの借用も驚くほど多い。近年の説によると、『フロリヤンとフロレット』には他の作品群からそのままに近い形の借用が多いのに対し、『クラリスとラリス』にはその傾向が弱いことを根拠に、『クラリスとラリス』の方が先に成立したと推測されている。後述するとおり、『クラリスとラリス』の成立が 1268 年以降と考えられるため、『フロリヤンとフロレット』の創作年代はその後だと考えられる。この推測が正しければ、『フロリヤンとフロレット』の成立時期は、シチリア王国がアラゴン家のペドロ３世のシチリアとアンジュー家シャルル１世のナポリ王国へと分裂した時期に重なってくる。
②先行作品群との接点（１）―「アーサー王物語」との接点　『フロリヤンとフロレット』には、12 世紀後半以降に古フランス語韻文・散文で書き継がれてきた「アーサー王物語」だけでなく、「武勲詩」「古代物語」「冒険物語」などの影響も色濃く残されている。比較対象をクレティアン・ド・トロワの作品群と「聖杯物語群」の要の位置にある『ランスロ本伝』（1215～1225 年頃）に絞って検討すると、『フロリヤンとフロレット』の作者が筋書き・テーマ・モチーフの点で数多くの借用を行っていることが分かる。こうした借用の観点から、先行研究では比較的最近まで、『フロリヤンとフロレット』が先行作品群の模倣・亜流とみなされてきたが、本研究では作者による独自の改変を重視した。クレティアン・ド・トロワの作品群と比較した場合、特に際立ってくる『フロリヤンとフロレット』の独創性は、フロリヤンがシチリアとギリシアの支配者としての地位を確立した後、育ての母にあたる妖精モルガーヌが彼をモンジベルという名の異界へ呼び寄せ、永遠の生を与えるという大団円に認められる。『フロリヤンとフロレット』では、クレティアンの現存第１作『エレックとエニッド』（1170 年頃）の筋書きをなぞるかのように、フロリヤンとフロレットは冒険旅行を経て戴冠式に至るが、エレックとエニッドとは異なり現世に留まることはない。
③先行作品群との接点（２）―「冒険物語」との接点　シチリア（またはプーリア）王子が主人公でありイタリア半島南部を主な舞台としている点で、『フロリヤンとフロレット』との著しい類似が従来から指摘されてきたのが、「冒険物語」というジャンルに属する『ギヨーム・ド・パレルヌ』である。「冒険物語」はヴェルダン＝ルイ・ソーニエが指摘するように、「その舞台がブルターニュではなく、しかも登場人物たちが他の物語に再び現れてこない物語」を指し、「神秘感よりも写実主義の傾向を示している」ことから「写実的」物語と呼ばれることもある。『ギヨーム・ド・パレルヌ』の成立年代については、1220 年代説（アレクサンドル・ミシャ）と 1280 年代説（クリスティーヌ・フェルランパン＝アシェ）が競合しており、作者も時代背景も判然としないため、『フロリヤンとフロレット』との直接の影響関係を議論することは難しい。しかしいずれの作品も、クレティアン・ド・トロワの現存第２作『クリジェス』（1176 年頃）を念頭に置いていることは間違いなく、「伝記物語」「冒険物語」というジャンルの違いを越えて、13 世紀の韻文物語の作者が先行作品から独自の借用と改変を行っていることが確認できる。『フロリヤンとフロレット』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』には、創作年代や時代背景など不確定要素がいまだに数多く残されているが、この２作品には少なからぬ共通点がある。そのため 13 世紀のフランス語圏に、「シチリア王子が冒険の果てに、一時的に失われていた己の権利を回復する」という筋書きを持った宮廷風騎士道物語の祖型が存在した可能性は十分にあるだろう。
④『フロリヤンとフロレット』の散文化
中世フランス文学研究の近年の新しい潮流の１つとなっているのが、12 世紀後半から 13 世紀後半にかけて「韻文」で書かれた作品群が、14 世紀末から 16 世紀にかけて「散文」化されたという現象についての研究である。13 世紀に韻文で書かれた『フロリヤンとフロレット』もその２世紀後に散文化され、現在パリ・フランス国立図書館所蔵の２写本（1492 番写本と 1493 番写本）が散文作品を伝えている。リシャール・トラクスラー氏が行ってくれた『フロリヤンとフロレット』の韻文版と散文版の比較により、散文版が筋書きの点で韻文版に極めて忠実であり、エピソード間のつなぎの表現が 15 世紀の読者のために書き直されているにすぎないことが判明し

た。こうした研究は「伝記物語」の「散文」化という、中世期からルネサンス期にまたがる新たな研究の方向性を示してくれている。

（３）『クラリスとラリス』をめぐる諸問題

①写本と推定創作年代　作者不詳の『クラリスとラリス』は、8 音節詩句で 30372 行を数える韻文物語で、「伝記物語」の中では長編の部類に属する。主人公はタイトルに名が出てくる若者たちであり、唯一無二の親友となった２人は、試練の果てにアーサー王の知遇を得て、それぞれ意中の女性と結婚する（クラリスはガスコーニュ王妃リデーヌ、ラリスはイヴァンの姉妹マリーヌを妻に迎える）。『フロリヤンとフロレット』と同じく、『クラリスとラリス』を伝える写本も１点のみ現存する。それは 258 葉からなるパリのフランス国立図書館フランス語 1447 番写本であり、『フロワールとブランシュフロール』と『大足のベルト』も併せて収録している。フランス東部出身と推測される写字生は１人で、おそらく 14 世紀初めに筆写を行っている。『クラリスとラリス』の作者について詳しいことは分からないが、プロローグに見つかるコンスタンティノープル、アッコン、アンティオキアをめぐる史実への言及から、作品の創作年代は 1270 年頃に絞りこむことができる。プロローグに出てくる「皇帝フレデリック」は、シチリア王フリードリヒ２世（1194～1250 年）と思われることから、作品の時代背景としては、シチリアの支配者がホーエンシュタウフェン家からアンジュー家に代わった時期を想定することができる。

②先行研究と再評価の動き　19 世紀末にガストン・パリスは『クラリスとラリス』について、「これはまさしく衰退期の産物、数々の模倣の絶え間ない模倣、延々と続く常套表現の集成」と評した。こうした否定的な評価は 20 世紀後半まで研究者の間で繰り返され、アレクサンドル・ミシャは 1978 年に刊行された、13 世紀までの中世フランスの物語（ロマン）を扱った共著の概説書の中で、『クラリスとラリス』を「乏しい想像力の持ち主による粗削りな仕事」であり、物語前半の錯綜した冒険群がまったく興味を惹かないのは「どうしようもないほど単調で平凡だからだ」と述べている。『クラリスとラリス』を織りなす多彩な冒険群については、1960 年代にダグラス・ケリーがジャン作『リゴメールの驚異』（1250 年頃）と対比したことにより新たに光が当てられるようになった。その後 21 世紀に入ると、『クラリスとラリス』の新しい校訂本を刊行したコリンヌ・ピエールヴィル氏を中心に、作品を再評価する動きがようやく現れる。本研究では主としてピエールヴィル氏の研究成果を導きの糸とし、先行作品群との比較から『クラリスとラリス』の独創性を明らかにした。

③『クラリスとラリス』の独創性

(a)恋愛と友情の物語　物語の主人公はクラリスとラリスという名前のよく似た２人の若者であるが、姿形が酷似しているわけではなく、出自も性格も異なっている。ラリスがドイツ王アンリの息子であり、アーサー王の一門にも連なる存在であるのに対し、クラリスはエダリス公の息子と記されているのみで、出自が謎めいている。物語冒頭のクラリスは、食卓で肉を切り分ける侍臣としてリデーヌ王妃に仕えるうちに王妃へ恋愛感情を抱き、同じ日に騎士に叙任されたラリスを唯一無二の親友とする。こうした筋書きの背景には、「アーサー王物語」の要となる「宮廷風恋愛」と、「武勲詩」や「古代物語」に見られる戦士たちの「友情」という、一見したところ相容れない２つの概念が認められる。『クラリスとラリス』の作者は、クラリスの親友ラリスが王妃リデーヌの兄弟という設定にすることで、宮廷風物語と英雄叙事詩という２つのジャンルを見事に融合させたと言えるだろう。クラリスはリデーヌ王妃に対して恋愛感情を抱くが、ラドン王に対する臣従の誓いに決して背くことはない。そして親友のラリスに助けられてリデーヌの愛情を徐々に勝ち得ていき、ラドン王の死後にリデーヌとの結婚に至るのである。一方のラリスは、クラリスに助けられながら、相思相愛となったマリーヌとの結婚を実現させている。このように『クラリスとラリス』は２つの「婚姻物語」からなっており、２人の主人公はいずれも相手の恋愛に寄り添い、その成就に力を貸している。２人の主人公の登場から大団円までに約４年しか経過していないことから、ピエールヴィル氏はこの物語が主人公たちの人生の一時期に焦点を当てた「挿話物語」に相当すると考えている。しかし、ガスコーニュ宮廷で騎士となった２人が、数々の試練を経た後でアーサー王の知遇を得て、それぞれが結婚に至る筋書きに注目するなら、『クラリスとラリス』は「伝記物語」の範疇に含められると言えるだろう。

(b)騎士社会のユートピアと連帯　『クラリスとラリス』では、２つの「婚姻物語」の枠内に多岐にわたる探索がはめこまれており、これが物語の分量を大きく膨れ上がらせている（対になるエピソード群に注目すると、作品は６つの部分に分けることができる）。探索の主な契機はラリスの２度の失踪であり、物語の第２部では、旅の途中で妖精マドワーヌによって妖精の谷へ連れ去られたラリスの探索に、旅仲間だったクラリスと他の 10 人の騎士が別々に乗り出す。また物語の第５部では、デンマークのタラス王の軍勢に捕らえられたラリスを助け出すため、クラリスと他の 29 人の騎士が 10 人からなる３グループに分かれた後、それぞれが別々の道をたどる。数多くの騎士が失踪した騎士を探しに出かけるという展開は、マネシエ作『ペルスヴァル第３続編』（1220 年頃）や、『リゴメールの驚異』といった先行作品にも見られる。いずれの作品でも探索に出た騎士すべての冒険が語られないのに対し、『クラリスとラリス』では割かれる行数が騎士ごとに異なるとはいえ、第２部の 11 人、第５部の 30 人のいずれの探索でも、全員の冒険が網羅的に語られている点が新機軸である。「アーサー王物語」の実質的な創始者であるクレティアン・ド・トロワの作品群では、エレック、クリジェス、イヴァン、ランスロ、ペルスヴァルといった個々の騎士に焦点が当てられている。このように単独で遍歴を重ねながら個人的な武勇を積み上げ、同時に貴婦人の愛を勝ち得るというタイプの騎士は、クレティアン・ド・トロワ以降

の韻文や散文による「アーサー王物語」にも多く登場している。これに対し『クラリスとラリス』の作者は、一個人としての騎士ではなく、固い友情の絆で結ばれた騎士たちの武勇を描くという方向性を選択しており、クラリスとラリスがその先導役となっている。アーサー王自身も、『アーサー王の死』で描かれた崩壊寸前の騎士団を束ねる弱々しい首領ではなく、ジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア列王史』で描かれた模範的な君主としてのオーラを取り戻し、円卓騎士団の結束を呼び覚ましている。

(c)「聖杯」の不在と「人間」の尊重　『クラリスとラリス』には婚外恋愛が描かれず、アーサーの王国の崩壊を招くことになったランスロとグニエーヴル王妃の姦通愛への言及も見つからない。「姦通愛」の不在と並んで『クラリスとラリス』を特徴づけているのが、アリマタヤのヨセフがキリストの聖血を受けたとされる「聖杯」の不在である。ペルスヴァルは作中に現れるが、その姿は『聖杯の探索』（1220～1225 年頃）における「聖杯」の探索者ではなく、クレティアン・ド・トロワが『クリジェス』の中で描いた宗教色のない勇敢な騎士なのである。『聖杯の探索』では遍歴騎士の前に隠者が頻繁に現れて、騎士の経験した冒険の意味をキリスト教的に解釈し、騎士に痛悔や改悛を迫る。しかし『クラリスとラリス』に隠者はほとんど姿を見せず、宗教上の教えを説くこともない。『クラリスとラリス』の騎士たちは宗教上の罪を恐れることもなく、虐げられた人々や弱き者に救いの手を差し伸べ、現世で果たすべき義務に全力を傾けている。『クラリスとラリス』の作者は、ガラアドが具現する天上の騎士道ではなく現世の騎士道に目を向け、あくまでも「人間」中心の思想を貫いているのである。その典型例が、デンマーク王に捕らわれていたラリスを解放する手段であり、クラリスとその仲間たちは敵軍の眼を欺くために隠者に身をやつしている。一同は「聖杯」の探索ではなく、戦友ラリスの探索に心血を注いでいる。

(d)「驚異」の合理化　「人間」中心の考え方は、作中に登場する「驚異」の扱い方にも反映されている。確かに、さまざまなジャンルの先行作品から数多くの借用を行っている『クラリスとラリス』には、ケルト起源の超自然的なモチーフが満載である。しかしこの物語の作者は、そうした要素をできる限り合理的に解釈しようと努めている。そのため、従来の「アーサー王物語」であれば異界の住人や悪魔的な存在として描かれることの多い小人、巨人、妖精などの存在も、限りなく人間の姿に近づけられている。このうち妖精の変貌については、ラリスを狂おしく愛するマドワーヌの動向のうちにたどることができる。ブロセリヤンドの森に住む 12 人の妖精の 1 人であるマドワーヌは、13 世紀に古フランス語散文で書かれたアーサー王物語群が描くモルガーヌの属性を踏襲した存在であり、魔法を駆使してラリスを妖精の谷へと連れ去り、恋愛を強要しようとする。マドワーヌは、初出の時点では美女の姿で描かれていたが、ラリスがマリーヌに恋心を抱くようになって以降は、語り手とラリス自身から「老女」呼ばわりされ、最終的にラリスによって悪しき行動が続けられなくなってしまう。妖精マドワーヌは単なる妖女にとどまらない点も注目に値する。最初の出会いのときにラリスの子を妊娠したマドワーヌは、物語の最後では成長した息子をラリスの後継者にするため、ラリスとマリーヌの結婚を阻止しようとして失敗に終わるからである。このように妖女であると同時に極端な母性愛を見せる妖精の姿は、「武勲詩」の「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」が描くモルガーヌと酷似している。この作品では、妖精モルガーヌが勇士レヌアールをアヴァロンへ連れ去り、一夜の情事でもうけた息子コルボンが将来レヌアールの領土を受け継ぐことができるよう、レヌアールが先妻の息子マイユフェールと再会するのを阻止しようとするが、その試みに失敗している。

④今後の『クラリスとラリス』研究　ピエールヴィル氏が「13 世紀の物語大全」と呼ぶ『クラリスとラリス』は、「伝記物語」というジャンルの枠をこえて、古フランス語韻文・散文で書かれた「アーサー王物語」の変遷をたどる上で極めて重要な位置にあり、今後もさまざまな観点からの詳細な検討が必要である。たとえば、クレティアン・ド・トロワの物語群を始めとした先行作品との関連、物語の巧みな構成、物語を織りなす多彩なモチーフ群、百科全書的な嗜好を反映した数多くのエピソードと登場人物などを主な検討課題とすべきだろう。それにより、「散文」形式の「アーサー王物語」が主流となっていた 13 世紀後半の時点で、なぜ一群の物語作家が「韻文」という形式にあえてこだわったのかが明らかになるはずである。13 世紀後半から 14 世紀にかけて「散文」で書かれたアーサー王物語群（『ペルスフォレ』や『アルテュス・ド・ブルターニュ』など）については、クリスティーヌ・フェルランパン＝アシェ氏を中心に進められてきた共同研究により、その重要性が明らかになりつつある。本研究で主な対象とした『フロリヤンとフロレット』および『クラリスとラリス』も、フランス語圏でアーサー王伝承がいささか下火になっていた 13 世紀後半の作品であり、同時期に「散文」で「アーサー王物語」を著した人たちと同じ問題を共有していた。それは先行作品群から筋書き・テーマ・モチーフを借用し、さまざまな書き換えを組み合わせる一方で、物語の地理的な枠組みを拡大し、アーサー王伝承を蘇らせることだった。したがって「伝記物語」に属する 13 世紀後半の「韻文」作品群の分析は、同時代の「散文」アーサー王物語群の分析と並行して進めていく必要もあるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 渡邉浩司	４．巻 54
２．論文標題 「『フロリヤンとフロレット』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』ー13世紀の「伝記物語」と「冒険物語」」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 リシャール・トラクスラー（渡邉浩司訳）	４．巻 54
２．論文標題 「五十歩百歩？　ー『フロリヤンとフロレット』の散文化をめぐって」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）	６．最初と最後の頁 237-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡邉浩司	４．巻 53
２．論文標題 「『フロリヤンとフロレット』における妖精モルガーヌ」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）	６．最初と最後の頁 33-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡邉浩司	４．巻 99
２．論文標題 「「伝記物語」の変容（その４）ー『フロリヤンとフロレット』をめぐって」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	６．最初と最後の頁 399-432
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邉浩司	4．巻 102
2．論文標題 「『ロキフェールの戦い』における妖精モルガーヌー「アーサー王物語」の「武勲詩」への影響」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	6．最初と最後の頁 321-350
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡邉浩司	4．巻 55
2．論文標題 「「伝記物語」の変容（その５）ー『クラリスとラリス』をめぐって」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）	6．最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 コリンヌ・ピエールヴィル（渡邉浩司訳）	4．巻 55
2．論文標題 「『クラリスとラリス』」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）	6．最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 渡邉浩司
2．発表標題 「モルガーヌからマドワーヌへ―『クラリスとラリス』における妖精像」
3．学会等名 国際アーサー王学会日本支部2022年度年次大会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関